

48 日韓医学交流史

杉原徳行の業績と評価

渡辺 晴香・金 善珉・丁 宗鉄

近年、過去のわだかまりを捨て、徐々に韓国と日本の文化交流が行われる様になってきた。第一次世界大戦後、韓国では日本の植民地政策への反感もあり、戦前の日本人の業績が評価される機会はなかった。今回我々は、今日の日韓両国の伝統医学、生薬研究に大きな影響を与えた杉原徳行（元岐阜大学薬理学教授）の功績について調査した。現在、ユネスコとWHOから天然物研究センターとして指定され、国際協力研究など様々な活動がなされているソウル大学天然物研究所では、1999年12月創設60周年を迎えたが、出席者の中で初代所長であった杉原について知る人は少なかった。杉原は1926年（大正15年）に京城帝国大学の薬理学第2講座担任教授となつて以来、1946年に教授退官まで約21年間韓国の生薬

研究と行政に指導的役割りを果たした。その間、朝鮮総督府の委託を受け、医学部付属の生薬研究所（現ソウル大学天然物研究所）創設などの業績を残した。生薬研究所はその後薬学部に移管されたが、場所はそのまま医学部病院内に残り今日まで続いている。杉原徳行は、島根の出身で1920年（大正9年）に京都帝国大学医科大学を卒業した後、1923年に朝鮮総督府京城医学専門学校に講師として赴任した。この間2年間欧米留学をした後、1926年（大正15年）京城帝国大薬理学教授に就任した。杉原は石戸谷勉氏と共に朝鮮半島の漢薬について調査を始め、1928年に朝鮮総督府より薬用人参に関する調査委託を皮切りに朝鮮半島から旧満州にかけての漢薬の調査研究を手掛けた。1935年6月、また総督府より生薬研究所の創設に関する事務を委託され、1937年京城帝大附属生薬研究所を設立し、次いで開城市に、京城帝国大学附属として生薬研究所が開設された。さらに濟州島にも薬草栽培所を開設した。開城市の生薬研究所での研究対象は主に薬用人参が中心であった。濟州島の薬草園はその後濟州農科大学に引き継がれてい

る。現在もまだ天然物研究所には、生薬標本が約150

00点「石戸谷コレクション」として大切に保管されて

いる。これらの標本は朝鮮半島および中国、満州の漢薬

資源の調査で採取されたものである。さらに集大成し、

『CHINESE DROGEN』として出版され、漢方薬を常用

する韓国、中国、日本の漢方薬標本の基準になっている。

敗戦時と朝鮮戦争の際に日本人に関連する資料などの大

半が廃棄、没収された為、韓国内には杉原に関する資料

は残されていない。しかし杉原の門下生(戦後初のソ

ウル大学天然物研究所の所長)らによつて上記の生薬標本

は必死の努力のもとに現存された。杉原徳行は敗戦後、

帰国し、1951年に岐阜県立大学医学部長として、同

大学の創設に努め、約10年間薬理学教授としてさらに漢

薬を中心に研究を続けた。1962年に韓国薬理学会に

招待され渡韓した際、京城大学時代の教え子達によつて

大いに歓迎を受けた。今回、朝鮮時代の杉原を知る、ソ

ウル大学天然物研究所の元所長等より、杉原の功績につ

いて、再確認した。杉原をめぐる、困難な時代を乗り越

えてきた日韓両国の研究者たちの医学、薬学における系

譜についても触れたい。

(東京大学医学部生体防御機能学講座)